

なんなのか

なん
なの
か

町の芸術家

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどとは思わない

子供の魂をそのまま

抱えているから

今日も大根の葉っぱに止まる

バツタを追って大騒ぎになる

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどとは思いもしない

お婆さんお先にどうぞ

とバスに乗る順番を譲られても

自分に好意が向けられている

などとは受け取らない

お婆さんと呼ばれたことに立腹し

お爺さんからお先にどうぞと

四十年配の紳士を睨み

やり返してしまふ

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどと思わない

しかしシルバー割引のテーブルには

先陣きつてちやつかり席を占める

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどとは思わない

店員をつかまえると

自分の体力の続く限り離れず

説明を求める

この色合いとこの色合いの

どちらが映えるかしら

このスタイルとこのスタイルの

どちらが似合うかしら

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどはわきまえない

子供の魂をそのままに

抱えているから

大根の葉っぱに止まるバツタを追い

籠に放つては一日中

縁側で何枚も何枚も

スケッチに余念がない

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどということばがない

バツタに飽きると

自転車にまたがり信号も待たずに

交差点に突入する

子供の魂をそのままに

抱えているから

音をきしませ急ブレーキで止まる車に

ひらひら手を振る

元旦に

実によい日和だ

木々の枝に積もった雪を

爽やかな条光が照らす

それは氷砂糖だ

それはシャーベットだ

一面の銀世界だ

仮設テントでは

突然仕事を失った人たちが

伸び放題の髭面のままで

ポリ容器に配られた

雑煮を無心に食っている

一月前までは車のドアを

毎日毎日精密機械よろしく

取り付けてきた腕が

ドアも金具も車も工場も

いっぺんに取り外されたのだ

そんな無体な

そんな滅茶苦茶な

そんな無慈悲な

などと考えるのも根が尽き

実によい日和なのに

実に美しい銀世界なのに

なにを怒鳴っても

なにに地団駄踏んでも

今は雑煮を食うことしか

他にすることはない

朝

清々しい気が満ち

清々しい光が屋根屋根を照らす

道が真っ直ぐに伸びており

空気がすっと流れていく

朝刊がポストに入り

刈り込んだばかりの槇の葉から

甘い香りが漂う

ランドセルが二つ三つ

角を曲がるまで手を振る

川の浅瀬では鯉や鴨や鷺たちが

ゆっくりと餌を探している

電車が入り出ていく

人が駅に吸い込まれ

駅から降り立ち

遮断機の前で急ぎ加減で待つ

交差点が膨らみ

水銀灯の光が知らぬ間に消えている

豪雨襲来

叩き付ける雨
ぶちまける雨

雨の大軍がうなりをあげて
攻めてくる

堰を切り
ダムが決壊したかのごとくに
雨が雪崩れ落ちる

小さい者たちの上に
気弱な者たちの上に
横柄な者たちの上に
勝ち誇った者たちの上に

タタタタタタタタタタ

ダダダダダダダダダダ

ヒユルヒユルヒユルヒユル
シユルシユルシユルシユル

ゴウゴウゴウゴウゴウゴウ
ドウドウドウドウドウドウ
ドンドンドンドンドンドン

豪雨襲来

豪雨の大軍襲来

小さい者たちの上に
気弱な者たちの上に
横柄な者たちの上に
勝ち誇った者たちの上に

なんなのか

雄叫びをあげ
攻めてくる

見よ 見よ

鉤裂きに走る稲光を
台風の唸りにも似た
虎落を貫きくる
幾千万の鬨の声を

占い

咲く、咲かない、咲く、咲かない
叶う、叶わない、叶う、叶わない

今日の運勢は

ワガママや自信過剰は禁物の時
事を始める前には再度点検すること
となっていた

それを一日の終わりに知る

当たっているといえば
当たっているようだし

見間違いだといえば

全くの見間違いかもしれない

北東はだめだとか

黄色のシャツはダメだとか
衝動買いに気を付けなさいとか
先祖への敬いが足りないだとか

いわれてみれば

たいてい思い当たる節があり

だったんだよなあ

だったんだもんなあ

というふうにはコんでしまう

北西の方にいけばよかった

シャツは赤色に決まってるでしょ

いらぬ週刊誌など買ってきて

墓参りなんか二年もいってないのね

一日の終わりにそんなこと

いわれても

ボコボコに塞ぎ込んで

しまうのが落ちで

叶う、叶わない、叶う、叶わない
咲く、咲かない、咲く、咲かない

なんてよせばいいのに

せっかく机の奥深くに

しまい込んだグッズなど取り出し

右にいつでも左にいつでも

上のぼっても下にくだつても

埒のあかない占いゲームに

神経のありつたけを注ぎ

寝る間を忘れはまり込んで

定年

今一つしっくりこない

猛烈に働かされてきたこれまでが
なんだったのだろうか

ところが、定年

年金の支給開始を四年、五年先に
伸ばしてしまつて

どうしろというのだ

かろうじて再雇用などという制度を
つくりはしたが

現場では露骨にもう用はない

何でこんなところにうろうろしてるの

という態度で迎えられる

あるいは、老害かと

まあ、再雇用先があるというのは
よい方かもしれないが

定年前までのカタキとばかりに
冷ややかな仕打ちを受けることがある

そんなふうにするのは

あるいは見当違いなのかもしれないが

責任がありそうで、なさそうな

中途半端な仕事か

どうにもしっくりこない

なんなのか

必要なのか、 unnecessaryなのか
などと職場で一人ごちてみようと

お前の人徳のなさのせいだと
ニタニタと笑われるばかりだ

怒り

つまらぬことで怒ってみたり
悩んでみたり

およそ埒もないことなのに
三日も経てばもうバカバカし過ぎて

あんなに本気で
何に捻れていたのかと
とんと己にアイツが尽きる

少しは大人になっても悪くはない
ということだろうが
どっこいそうは問屋が卸さない

結局また

つまらぬことで怒ってみたり

悩んでみたり

およそ埒もないことで
沈み込んでみたりが
またそこから生まれ始める

低気圧停滞

一月以上の間

低気圧が停滞している

毎日が雨、雨、雨

地面を叩き付ける雨

窓ガラスを叩き付ける雨

街中を不気味に黙らせ

土色に点滅させる

道路にも

膝頭ほどまでの水を溜め

地下の街にも流れ込み

電車やバスの運行を阻む

崖を崩し

瓦礫を押し流し

川を狂い走らせ

生まれ出たばかりの蝉たちは

あまりの異様な光景に

鳴くこともできず

交尾さえままならず

光というものを知らぬまま

落ち

濡れ逝く

プラス思考

夜中に転んで

したたかに腰を打ち付けた

しかし、捻ったわけでも

挫いたわけでもない

雨に降り込められ

鬱陶しさを通り越し

息苦しさに鰓で呼吸をしている

しかし、暗算もできるし

空想を秋空に飛ばすことも

できる

何を好んでか

机にかじりついて

埒もない小説や詩などを

書いている

いや、始終書かねばならない

という観念に囚われている

今日は何をしようかとか

何もすることがないなどとは

なりようもない

野球が始まると

プレイボールからゲームセット

までを見ないと納まらない

頼まれたわけでもないのに

三時間、四時間釘付けになる

しかし、見ないことでの苦しみ

の方が耐え難く

見ないことの三時間、四時間は

不毛の時間となる

元来プライドばかりが高く
気が短い

高望みをするばかりに

学歴も、仕事も、趣味も

全て中途半端だ

十八歳のとき医者に

匙を投げられたのだったが

どっこい食っていけるだけの

仕事には恵まれ

波の大小をくぐり抜け

定年を過ぎてもしたたかに

棲息している

南風

湿りを帯びた生暖かい風が吹く

肌に吹き出した汗を乾かすこともなく

顔にも首筋にも脇の下にも

さらに夥しい汗を吹き出させ

女たちの身に付けた薄い衣を

やたらとめくれ上がらせたりするが

男たちのか細い神経は麻痺したままで

一物を勃起させるには生暖か過ぎて

今夜も消化不良の時を刻んでゆく

ひどく湿りを帯びた生暖かい風吹けば

体も心も冷やせとの指令のとおり

なにやかやと苛立ち多く

なにやかやと不平不満が募るばかり

湿りを帯びた生暖かい風が吹く

肌に吹き出した汗を吹き飛ばすこともなく

心に浮かんだ不快を消すこともなく

冷や冷やとした思えばかりが流れゆく

青い鳥

長く続いた川の増水がやや治まり

涼し気な水音が戻ってきた

薙ぎ倒された川原の草は

褐色に色褪せていたりはするが

決して死滅してはいない

隙あらば芽を育まんと

水音のリズムにしつかり耳を傾けている

水に折れ臥し

土砂に埋もれた草の背を跨いで

背中の青い鳥が突然姿を現した

鳥はよく動く羽をきしきしと動かし

草の上から傍の枝にひよいと移り

少しだけ首を傾げ

次の瞬間にはまた元の草の上に戻る

鮮やかな青い背が

少し黄ばんだままの川水にきらりと

きらきらと光る

まるで光輝く青い絵の具を

塗ったのかと思えるほどに

青い鳥の背は一層きびきびと動き

川原の褐色の草色との対照が

極めて明確で小気味よい

土砂に埋もれた草の精でもあるのだろうか

背中の青い鳥は突如姿を現し

流れのままに水に折れ臥した草の上を

小刻みに歩き

傍の枝にすいと移っては首を傾げ

すぐにまた元の草の上に戻ってくる

柿の木

勝手に芽を出した洪柿の木は強い
二度も三度も根本から伐り取り
挙げ匂に放置していたのだが
その隙にするすると伸び出し
今では一番高い樹高を誇っている

周囲には丹精をこめた
マキ、カシ、ウメ、モチなどが
並んでいるが

柿の葉色が一番瑞々しく青い
最初から伐り取ったりしなけれ
ばどこまでどう伸びていたのや
らと思う反面
大切に構っていたとしたら
むしろ生きる気色少なく

雑草に隠れるほどにひよろりと
弱々しい木の類이었다ったのかもしれない

その証拠に

名物という甘柿の苗を取り寄せ
毎年施肥を怠らず、雑木は伐り取り
楽しみに成長を待っているのだが

桃栗三年、柿八年の八年を
とうに越したというのに
樹高も伸びず、一向に実をつける
気配すらない

後ろから追いかけてきた洪柿が
二度も三度も瀕死の重傷を負い
根性で伸びてきたというのに

なんなのか

もう青い実をつけようとする

これは偶然ではないのかもしれない
本当に選ばれたものは

幾多の苦勞や反骨の中から
土をもたげ

空をもたげて
満を持し

姿を現すものであるかもしれない

法悦

試用期間で首になったと

身も世もあらぬげに嘆いているが

どっこい、喜ぶがよい

ようやくお前の上にも大いなるものが

手を差し伸べておられる

お前が必要とすることを察し

躓きの石ころを転がされたのだ

そうでもないかと

お前は傲岸無比のままです、足るを知らず

足元を見ず

また、上には上があるということにも

気付きようもなかった

お前の前をふっと横切る影

風が吹き渡り

嵐が吹き募つても

お前が必要とすることを察し

大いなるものがいつも動いている

お前自身が約束して誕生してきたことの中身を

大いなるものはちゃんと知っている

大いなるものとお前は

強く太い縁で結ばれている

試用期間で首になったと

身も世もあらぬげに嘆いているが

いよいよ、この時来たると喜ぶがよい

格差

あるところにはあるのだ、お金が

研究室でいうならば

ここと行ったところにはうなるほど

お金が集まり

使いきれぬことに頭を悩ましている

隣の研究室では

コピーも節約し、鉛筆一本を大事に使う

人が群れてくるのは

当然のごとく前者の方で

後者の方には

よほどのことでもないときりつかない

同じことは、国内外のいたるところに

あるのではないか

食料の捨て場に困り

リサイクルの真似事などをしている

かと思えば

争いと、疫病と、飢えとで

塗炭の苦しみを舐めている

前者を勝ち組とってよいのかどうか

疑わしいが

後者の方になるとさすがに

心が乱れてくるのは否めない

前者にも、後者にも

前者には殊に

狡猾な火事場泥棒が徘徊し

人を人とも思わない輩のさばることに

ならないことだけを願うのみだ

労働考

時間勤務になつて

こゝも受け身でいていいものかと思つ
いや、こゝも受け身でなくてはならぬもの
かと思つ

時間勤務になる前は

十時になろうと、十一時になろうと
積極的に、自ら考え動くのが当たり前で
休日であるうと、夜中であろうと
家にまで仕事が進いかけてきた

今、有効求人倍率は四割と少しだ

働き盛りでなければならぬ若者に
時間勤務や、派遣勤務でさえ十分に
与えられないという

一方、数少ない正規職員は

時間無制限で働くのが当たり前で
十時、十一時はおろか
朝方まで仕事がかかるという

今、有効求人倍率は四割と少しだ

おかしいことがおかしいと
誰も言えなくなつてしまつては
泣けばいいのか、バカバカしさに笑うしか
ないのか

泣くしかないのか、バカバカしいと笑うしか
手はないのか

飛行機雲

西の空に飛行機雲が一筋

直線の形はなく

かなり周囲の雲や空と

重なり合って

あわあわとしている

それでも飛行機雲

最初は青空を突っ切り

凜と伸びていたのかもしれない

青空の一面に

なにかの明確な意志を

くつきりと

描いていたのかもしれない

いふなれば初老の飛行機雲

足取りは不確かだ

背中もいささか丸く

頭に至っては白いものが

ザワザワ揺れる

それでも飛行機雲

周囲の綿雲に呑み込まれる

ことを潔しとせず

折りからの風に吹き払われる

ことを頑固に拒んでいる

西の空に飛行機雲

山の端のあたりまで

よろけ辿り着いた恰好なのに

その目は変わらず

天空の頂を睨んでいる

木漏れ日

若葉で蒸し返りそうな林を歩く

上着を脱いで額の汗を拭う

スギやヒノキやクスの大木に混じって

モミジやケヤキやツバキの若木にも

新芽がびっしり伸びている

人里からほんの一跨ぎしただけの

距離にしかすぎないのに

林特有の涼やかな気に満ち

林でしかない匂いを十分に発している

微かに風が抜けていく

木漏れ日が緑色の光となって

ゆるやかにこぼれている

林は心地よいから

思い切り伸びをする

そうすると尻のあたりが甘痒く

緊張する

抱えてきた鬱々とした気分も

林の気に身を委ねていると

なにやら懐かしい

はるかな思いに変わっていく

木漏れ日の特にゆるやかに

こぼれるあたりに

ふいに湧き出てきたのではないかと

思われる小さな水流

苔むした小石の間を

なんなのか

日の光を透いて静かに流れる

スギやヒノキやクスの大木が

高く広く枝を張り

その枝々をくぐってきた木漏れ日が

モミジやケヤキやツバキの若木の

黄緑の葉をやさしく揺らし

鮮やかに照らし出している

パソコン考

降って湧いたという話だ

昨日まで軽やかに文字を刻み

計算をし検索をしてくれていた

パソコンソフトが

朝一番のお決まりの作業で

立ち上がらない

横文字のなにかのメッセージが

やたら出ているが

なにが問題なのか

なにが不満なのか

仕事の必要上

どうしても動いてもらわねば

ならないものだから

急遽アンインストールと

インストールの繰り返し

こちらが焦っているとみると

相手もここぞとばかりに

ストライキを決め込むつもりらしく

IT専門用語らしいメッセージを

立て続けに発し

睨み付けてくる

仕事の必要上

どうしても動いてもらわねば

困るのだ

ほんの昨日までの

あの機嫌のよさはなんだったのか

OFFにするときだって

なんなのか

ひらひら手の平をふり

じゃあまたねという合図を

見せてくれたのではなかったか

それとも

日頃から隙をみて

ノーサンキューという

合図を送っていたのかもしれない

馴れ合ってしまった

相手の表情を読み取ることさえ

怠っていたと

いうことなのだろうか

パソコンという

このちよつと気難しい淑女は

あなたの顔を見るのも大嫌い

というセリフを

ときおり激しい剣幕でもって

迫りたがるのだ

泣いてどうなる

このようなときに泣くなど

見苦しいではないか

何度も忠告がなされて

きたではないか

その意味を解せず

ひとりよがり動き

いきなり首になったなどと

わめくではない

その兆候は幾度もあった

相手の出方を非難し

受け身にばかり動いていては

来るべきものがやってくる

恨むなどという

ますます己の度量を引き下げる

ことではお粗末だ

恨みが恨みを呼ぶという

お決まりの

連鎖の中に閉じこめられて

しまうだけでしかない

相手のことを許せ

相手の非があれば許せ

相手の横暴を許せ

その前にお前が

相手に感謝しろ

お前を根底から変える

大きなチャンスを与えてくれた

少々痛い

なんなのか

これはラッキーだ

前を見る

しつかり前を見る

目を背けることなく前を見る

大きなチャンスなのだ

千載一遇のチャンスなのだ

主張などなく

いきなりフラッシュでも
焚かれたという
思い出し方だ

主張を貫き
激しく言い募って
意固地になったときの
ことを

なんであんなにこだわり
激しく詰め寄り
詰め寄られたりしたのか
いったい
あれはなんだったのか
今となっては

忘れてしまい
細かくは思い出せもしない
というほどのことに
なんで

身も世もないほどに
うろたえ
こだわったのか
それらの殆どは
主張なんてものの
体をなしていない

行きがかり上
感情だけが走り
激昂の余り目の前の階段を
脈絡もなく駆け上った

というだけのことなのだ

主張なんでもものではない

そんなしやれた

ものではない

しかし

今もまだ続けている

真つ直ぐに歩めば

よいところを

真つ直ぐに歩まねば

ならぬところを

余所の方向に

いたずらに目を移し

落ちつきなく

手綱を引きちぎり

激しく吠えたとて

駆け出してゆく

意気地のない犬に

なりきつて

しまおうとしている

応援歌

新入社員のみんな

この世界大不況の中

めでたく入社的身とはなったものの

理不尽な扱いに

悩んではいないだろうか

内定取り消しという

道の替わりに

新入社員とはなったものの

即戦力とならねばならない

即断即決をせよ

仕事の覚えが遅い

ケアレスミスが多い

到底将来の見込みがない

などという口説で

巧みに片隅に追いやられ

試用期間なのだから

後一月の間に

かくかくしかじかの

ノルマが達成できねば

どういうことになるのか

わかっているだろうね

と詰め寄られたり

念書にサインをさせられたりする

どんなに懸命に働いても

どんなに右往左往しても

誰に助けを求めても

職場が職場でなく

死刑という判決が先にありきの

首狩り場にはなつてはいないだろうか

なんだかそんな気がする
のは気のせいだろうか

もつとも

確たる話ではないので

杞憂であればいいのだが

追い出すつもりか

新入社員雇用という

作戦があるやにも聞く

全くの杞憂であれば

いいのだが

いまどき

ぶっそうなことばかりが

平気でまかり通る

万が一そんなことで

あつたりしたら

新入社員の諸君

君の評価を

空に委ねたまえ

君自身で

鬱々と抱え込むことだけは

必要ないことだ

卑怯な作戦のもとに

一人や二人の人間が

君の人格について

とやかく言おうとも

その卑劣な悲しい相手の

ことを憐れみ

全てのことを

空に委ねたまえ

五月と雨

五月の雨もいいものです
礫となつて落ちてきたかと思つと
からりと日の光が覗いたりします

霏つたり霞んだり
肌にやんわりと
まとわりついてきたりします

それが
決して鬱陶しくない程度で
移りゆきます

雨もよし
風もよし
日の光もよし

川では小さな魚や
巨大な金鯉や
亀や家鴨がはしゃいでいます

五月の雨もいいものです
川べりを
雨礫に打たれながら
人々が声をあげ駆けていきます

どうにでもなれ

こだわりを捨て、いつそ投げ出してしまおうと
言うこともある

叶うことのために、投げ出してしまおう
というわけではないが
どうにも、こうにもならないときは
どうにでもなれだ

小さなプライドや、建前を放り捨ててしまおうと
なにを恐れるでもないことが、よくある

開き直るつもりではないが
小さな籠の扉を開け、空にでも、地にでも
どこにでも行ってみるだ

一巡りして元の巣に戻ろうと、戻るまいと

それはそれ

どうにでもなれ、と口ずさみつつ
至極丁寧な仕事をやらかしたり
素晴らしい花を活けたりすることが
よくあるではないか

眼鏡

眼鏡をかけ始めて三年になる
百円眼鏡から始めて
せいぜい五千円のやつを
十本はもっている

眼鏡など不要だ
と最近まで本気で思っていた
パソコンにかじりついても
四時間近いナイターを
毎日観ても

新聞も読めるし
山の頂上の測候所の屋根色まで
くつきりと見えていた

ところが

自分の書いた字が読めない
手元の文字が霞んでしまう

会議中

記録を朗読しながら
何度目をこすったか

それでも外に出れば
百メートル先の看板がはつきり
読み取れる

老眼という響きが
とにかく好きになれなかった
仕方なく手にしたものの
眼鏡というものは

ただかければよいというのではない
と始めて知った

鼻当てがずれる

レンズが目の前にうまく収まらない
耳にうまくかからない

どのフレームも

狐目型に反っている

そうなるよ

鼻当ての調整にペンチを用い

角度の調整に接着剤を流し

力まかせにフレームを曲げる

調整をする度に

かけたりはずしたり

手が滑って

レンズをヤスリで削ってしまったり
伸ばしたり縮めたりしているうち

鼻当てがポキリと
折れてしまったりする

そんなこんなで

意地の張り合いになり
いつの間にか

十数本にもなってしまった

結局目の前の字を読むとき

かける一つがあればいいのだから

十本をどう使うのか

このことが

今の大きな問題になっている

パソコンは

パソコンはやはり難しい

どこが難しいのかをお互いが

わからずに進めてしまうという仕儀で

これがなんとも始末に悪い

これをこう頼んだつもりが

あれをあんなふうに頼まれたつもりが

それぞれがてんでに違う道を

平気で歩いている

その食い違いが生じても

まるで説明に窮する

説明する本人のことばが相手には

相手の良識をもってしても

通じない

のかもしれない

どんなに言葉を尽くしても

どんなに具体的に話したつもりでも

なにかが足りない

なにかが妙だ

なにかが食い違ってしまう

例えて言えば

一つの山を見上げ

一方は英語で

一方は日本語で

顔を見合わせ互いに笑顔で

話し合っているというものだ

ということとは

原初の人々は

つまりパソコン用語を話すごとくに

なんなのか

ちぐはぐなことをやりながら

ちぐはぐな方向に

向かって歩きながら

言葉を作っていったのだろうか

夥しい年月を重ね

夥しい生き変わりを重ねながら

五月の朝

朝まだきに目が醒めます

三時とか四時

新聞配達バイクもまだです

この時期

東に開いた小窓に

昇りはじめる前の朝日の礫が

強烈なブラズマとなり

光をピンポイントに絞って

狙い定め

投げ入れてきます

何年前のことか

この家に越してきた五月の朝

あまりにも赤々とした

熱い光がどっと射してきたので

カーテンを開け放したまま

眠ったのかもしれないと

飛び起きました

日の当たる家

日の出の勢いの光のシャワー

を浴びる部屋

形容はいかようにでも

できませんが

カーテンを貫いてくる

獰猛なまでの

光のエネルギーの

凄まじさのことを

説明するのは難しいものです

例えていえば

光を受けた部屋は

真昼の部屋より数十倍も明るく

熱く燃え、強く輝き

それこそ眠気など

根刮ぎ剥ぎ取られてしまいます

遮光カーテンに替えてさえ

獰猛なシャワーの力は

まるで衰えません

一度覚えてしまった体は

もう日の出前には

すっかり起き出します

起きて朝の息吹を

聞くとときもあります

寝不足にふらついて過ぐす

こともあります

五月の朝は

今年もきつかりの時期に

やってきました

嬉しいことです

寝る前からワクワクして

朝まだきには目が醒めます

三時とか四時です

新聞配達のパイクも

とてもまだやってきません

飛行機

好きな飛行機に
乗れない期間が続いた

二十年前
久住山上空での乱気流に
乗客みんなが叫び
躍った

別府から福岡までの
わずかな距離の
わずかな時間の筈が
永遠とも思える拷問となった

予兆はあった
職場旅行に
飛行機でもあるまいに

墜ちたら職場は全滅だよ
と笑い合った

出発が一時間も遅れた
シートベルト着用のサインが
いつまでも消えなかった

数十メートルも
一気に落ちたかと思うと
次の瞬間には
その二倍もふうつと上る
という有様で
久住の山並みを下にして
視界にはなにもない
なにも見えない

まるで紙飛行機が

風のままに流れていくかに

飛行機はあてどなく

ごたごた

ふらふら揺れ流れた

その度にみんなは

薄い板底の真下の

荒れ狂う空気を力の限り

足で踏みしめ

力いっぱい突っ張り

両手を組み

わななき震えた

叫ぶとか

泣くとかの気色はなく

呻いたり

げいげい吐いたり

冷や汗だらけになり

足で踏みつけ

力いっぱい突っ張り

両手を組み

肩を丸め震えるばかり

とにかくシートベルトの

着用サインが消えることなく

ようやく

別府から福岡まで

流れ流れて

なんとか辿り着いた

ところが

辿り着いた筈の飛行機が

空港上空を回る

福岡空港の上空を

ごたごたぐるぐる

果てもなく旋回した

着陸許可が下りないという
実際は三十分かそこらの時間
だったのだろう

飛行機が着地したとき
歓声も拍手も
あがらなかつた

顔色は真っ青だった
みんなの顔も土気色で
シートベルトを外し
よろけながら立った

もう
嬉しいとか
安堵したとかいう
表情を出そうとすることさえ
忘れていた

花の絨毯

遊歩道に花弁が散り敷き
一夜の雨に濡れそぼる

浅い川原に花弁が散り敷き
川面はさくらの色に染まる

校門に花弁が散り敷き
休日の門が花の香に埋もれる

廃屋の屋根に花弁が散り敷き
折りからの風に舞い上がる

南の風に花弁が散り敷き
恋人たちをやがて眠らせる

歌いたければ

歌いたければ歌うがよい
グループがなんであれ
チームがなんであれ

ハーモニーが必要であるのなら
グループもチームも選別すべきだが

本当に歌いたければ
野原でも川原でも歌うがよい

ましてや今

〈シンガーソングライター募集中〉

であるのなら

まず歌ってみることだ

もちろん

歌いたければの話だが

もちろんどんな舞台で

どんなかたちで歌うのかを

知る必要はあるうが

しかし

まず歌ってみなければ

話にならない

本当に歌いたければ

野原でも川原でも歌うがよい

ただ今

〈シンガーソングライター募集中〉

宴だ

十五パーセントにも満たない支持を得て
新たな誌誕生なる

最盛期の二十五パーセントにも満たない数で
新たな誌誕生なる

しかし、これらは頭数だけのこと

中身はといえば

百パーセントを超えているのかもしれない
いや、ゆうに二百パーセントを超え

芳醇な美酒を湛えた

湖であるのかもしれないのだ

今、新たな誌の誕生の前に
実に美しい

実に色鮮やかな

甘露ともいうべき酒で満たされた杯を

恭しく

高く、たかく捧げる

メジロ

ガラス戸の向こう

一メートルほどのところに

いつもメジロがやってきます

侘助の白や

山茶花の赤の

花弁を目当てに來ている

ようです

メジロは緑色の羽を

せわしなく自在に震わせ

紫色の嘴で花の芯をつつき

枝から枝へ

素早く動きます

きよとんとした顔が

愛嬌いっぱい

一瞬なにかを考える仕草になり

すぐに結論を出します

目玉を賢しげに

前後左右に動かし

なあお前もそう思うだろう

というふうに問いかけてきます

一羽が去ると

すぐに二羽目がやってきます

侘助の白や

山茶花の赤の花弁は

「今度はこっちだ」

「こっちの方が汁が甘いよ」

「サンキュウ、またね」

「きつと、また来てね」

なんなのか

とでも言い合っているみたいで

メジロはそのたびに

親しげなウインクを

パチンパチンと何度もします

侘助も山茶花も

朝日の中ピンと鮮やかに輝り

とても誇らしげです

合格

合格という知らせ
おめでとう

いよいよ高校生だ
いよいよ巣立ちのときだ

キャンパスに
いろいろな色を塗るんだ
いろいろな色をね

いろいろな風の匂いを
嗅ぐんだ
暖かい風や
冷たい風もあるけど

いろんなことが待っている
いろんなことがね

贈りたいことばがある
どんなときでも

歌を忘れないでね
どんなときでも

楽しい歌を忘れないでね
いろんなことが待っている
きつといろんなことがね

夢一夜

ふいに夢一夜という歌の一節が
浮かんできた

この頃なんの予告もなく
メロディだけが浮かんでくる
はてなんという歌だったか
ということになる

オカリナを始めて三月
運指を間違えれば
頭の中のメロディは碎け散る
オカリナは侮れない楽器だ

それではとハーモニカにも手を出した
こちらは全くの自己流だ
目を閉じ音を探し探し

メロディを吹き当てる

オカリナもハーモニカも
中途半端だけれど
これらのお陰なのだろうか
なんの予告もなく
メロディがひよいと浮かび上がる

夢一夜は悲しいメロディだけれど
高音のサビのところがいい
〈ああ夢一夜一夜限りに〉
たとえ哀しいメロディであっても
体がメロディを奏するということは
理屈抜きに嬉しい
体がほかほか弾んでくる
なんともなく無性に楽しい

ハーモニカが吹けない

オカリナに手を焼きながら

二ヶ月にして

なんとなくきつかけがつかめてきた
ファミレドシラソファミレドシラの
最後のシラがうまくいかないけれど

簡単な楽譜なら

あまりまごつかずに

済むほどになつてきた

ところがハーモニカが吹けない

子供の頃

一度聞いたメロディは

たちどころに吹けた

のだったと記憶している

なにせ

理屈で考えるようになってから
音が拾えなくなった

自由に描いていた筈の絵も

屋根は黒か赤か緑だとか

柱は真っ直ぐだとか

そんなことを

考え出すと絵も描けなくなった

文章もそうだ

理屈がついてくると

光るものも光らない

もともと光る筈もないと

いわれればそれまでのことだが

しかしやはり

理屈で文章を刻み過ぎると

バネが弾けて

中身が

どこかに飛んでいってしまふ

そうしてみると

オカリナは理屈で吹いている

音を自然に拾うなどという

さまにはとてもなっていない

二ヶ月ぐらいのことで

喜んでいと

屁理屈屋で終わってしまふそうだ

音を拾うには

音の中に住み

音で呼吸をするほどにならないと

やはりいけないのだろう

ハーモニカが吹けない理由を

懸命に頭をひねり
理屈で考えている

お菓子町の町

ぼくは走った

走れば少しでも近づく筈だ

甘い香りに

甘い喜びに

甘い夢に

ぼくは走った

懸命に走った

走ればきつと少しでも近づく筈だ

少ししよっぱくても構わない香りに

少ししよっぱくても構わない喜びに

少ししよっぱくても構わない夢に

ぼくは走った

信じて走った

走ればきつと少しでも近づく筈だ

あるかなきかの淡い香りに

あるかなきかの淡い喜びに

あるかなきかの淡い夢に

ぼくは走った

へたり込みそうになりながら走った

走れば必ず少しでも近づく筈だ

迷路でしかないお菓子町の町を

おとぎ話と同じに飾られたお菓子町の町を

ぼくは懸命に顎をつき出しながら

ひたすら信じて走った

もみじ

もみじが赤く色付いていた

もみじが黄色く色付いていた

もみじが青々と茂っていた

同じ日のことだけど

もみじは

赤く、黄色く、青々と重なり合い

天空の真青の海に泳いでいた

もみじが赤く色付いていた

もみじが黄色く色付いていた

もみじが青々と茂っていた

同じ日のことだけど

もみじは

秋の風がふるふる吹くと

赤い葉も

黄色い葉も

青いままの葉も

枝をふうわりと離れ

くるくる舞って

天空の真青の海から

光の粒をちりばめ

はらはらとこぼれ始めた

しかしこぼれても

こぼれても変わらず

もみじは赤く色付いていた

もみじは黄色く色付いていた

もみじは青々と茂っていた

草を耨る

母が退院し

見舞うことも間遠くなった

なんとも久しく

深呼吸をすることを

忘れていた

どろりで息苦しく

胸苦しく

いつもイライラしていた

そんな変化にさえ

気付かなかった

久しぶりに深呼吸をし

深々と息ができるという

ことを思い出した

荒れた庭に出て

草を耨る

庭に出て思い切り

しゃがみ込んで

草を耨る

腰も足も痛くて

立ち上がったとき

よろめいてしまうほどに

痺れてしまう

狭い庭だけれど

ちゃんと土の臭いのする

ちゃんと青臭い根をもった

なんなのか

草がはびこっている

思い切り背伸びをし

がばりと屈み

うんうんと力込め

草を筆る

冬、將軍

冬將軍来たる

かのナポレオンを打ち負かした

冬の親父の荒々しき

骨身にとおる寒さ

骨身を砕く痛さ

ゴウゴウと、ビュウビュウと

冬將軍は物々しく

鳴りもの入りでやって来る

ペースメーカーを入れた家にも

足の手術をした家にも

老婆が今にも死にかかっているという家にも

赤ん坊が生まれた家にも

勲章をもらった家にも

古ぼけたガラス戸をガタガタ鳴らし

磨き込まれたビルの大理石のテラスに

飛沫の泡を吹き流し

三百メートルもある客船を

葉っぱと同じに揺らし

ペースメーカーを入れようとも

足の手術をしようとも

死にかかっている老婆でも

生まれたばかりの赤ん坊でさえも

勿論、勲章をもらった爺さんも

みんなケイレイをしなければ

ならぬと銃剣を突き付ける

ゴウゴウと、ビュウビュウと

冬將軍は実に物々しく

鳴りもの入りでやって来る

笛

楽しい笛を吹きたい
簡単な音で

優しいメロディーで

気持ちがあすっかり安心し

みんなが笑顔になり

みんなが輪になり

みんなが喜び

みんなが懐かしく

みんなが歌い出し

みんなが踊り出し

さざ波の音に似た

新しい潮の香に似た

青空に舞う鳥の声に似た

海原に漂う白い鳥に似た

はるかな故郷の思い出に似た

遠い日の思い出に似た

山々の頂に似た

一枚の花片に似た

そんな簡単な音色の

そんな高く低い音色の

そんなあたたかく優しい調べの

楽しい笛を吹きたい

点 滴

宙空にぶら下げられたチューブから
透明の液体が落ちてくる

ポトン、ポトン、ポトン
トポン、トポン、トポン
ポツン、ポツン、ポツン

宙空にぶら下げられたチューブから
二メートルの管が下がり
腕に鋭く刺された針をくぐり
透明の液体が落ちてくる

ポトン、ポトン、ポトン
トポン、トポン、トポン
ポツン、ポツン、ポツン

輸液ともいうらしいそれは
実に正確に時を刻み
実に正確な量を一粒の滴にして
透明な命の真水そのものの液体を
痩せた腕に送り込む

ポトン、ポトン、ポトン
トポン、トポン、トポン
ポツン、ポツン、ポツン

深夜の病棟に
一粒の滴は十分な音をたて
あまりにも十分な音をたて
寝静まっているらしい病棟が
大きく寝返りをうち
大きく歯ぎしりし

大きな呻きをあげる

ポトン、ポトン、ポトン

トポン、トポン、トポン

ポツン、ポツン、ポツン

消灯時間をとうに過ぎた病棟中が

あちらこちらでひそひそ話しを始め

あちらこちらで舌打ちをし始め

あちらこちらで目がらんと光り始め

あちらこちらで天井がきしむ音がする

ポトン、ポトン、ポトン

トポン、トポン、トポン

ポツン、ポツン、ポツン

実に正確に時を刻み

実に正確な量を一粒の滴にして

深夜の薄闇の中

宙空にぶら下げられたチューブから

実に寸毫も変わらず

実に実に懸命に

透명한命の真水である液体を

痩せた腕に送り込む

こんにちは

赤いランドセルの子が

こんにちはという

黒いランドセルの子が

こんにちはという

それはいつの頃のことだったか

しかし

知らない人に声をかけてはいけない

知らない人から声をかけられたら

急いで逃げなさい

知らない人から声をかけられたら

どこでもいいから知っている家に

駆け込みなさい

今ではこうだという

赤いランドセルの子も

黒いランドセルの子も

一緒に歩きなさい

まわりに気を付けるのよ

車に注意するのよ

それは今でも同じことだけど

しかし

知らない人には気を付けるのよ

知らない人には必ず注意をするのよ

親し気な人には気を付けるのよ

親し気な人には特に注意をするのよ

今ではこうもいうらしい

赤いランドセルの子が

こんにちほという

黒いランドセルの子が

こんにちほという

それはいつの頃のことだったか

しかし

怪しい人には気を付けるのよ

怪しい人には注意をするのよ

まわりのみんなにも気を付けるのよ

車にはいつも注意をするのよ

車には前からも後ろからも

いつもしっかりと注意をするのよ

これはいつの頃のことか

きつと、わたしたち大人がいけないのだ

きつと、わたしたち大人が招いたことだ

これはいつの頃のことか

きつと、わたしたち大人が作り出したのだ

きつと、わたしたち大人が信じられないのだ

きつと、わたしたち大人が恐ろしいのだ

赤いランドセルの子が

こんにちほという

黒いランドセルの子が

こんにちほという

それはいつの頃のことか

これはいつの頃のことだったろうか

楽しい笛

大人が踊り

子供が踊り

猫たちも踊り出す

そんな笛が吹きたい

笑って、笑って

転げまわって笑うなんて

きつとわたしの台詞には

あるわけがないと

いうでしょう

みんな

楽しい舞台が好きなんです

みんな

涙を流すほど

笑い合いたいです

今のわたしには

まだ笛など吹けません

せつかく始めるのです

笑って、笑って

転げまわって笑うぐらいの

楽しい笛が

吹きたいのです

お菓子のおた

動物のおた

山や川やトンボのおた

太陽や野原や牛たちのうた

わたしは変わるので

笛がわたしを誘うのです

なんなのか

楽しい舞台へ
ひっくりかえるぐらい楽しい
舞台へ

そんな楽しい
笛が吹きたいのです

オカリナのうた

雨があがって

おもいつきり高い空

それは青

オカリナのうた

涼やかに流れ

晴れやかに流れ

雨があがって

おもいつきり高い空

それは白

オカリナのうた

軽やかに流れ

はてしない遠くに流れ

雨があがって

おもいつきり高い空

それは紫

オカリナのうた

ときの彼方に

たとえようもなく

りんりんと

かなしいほどに

脈々と

歌うたい

切々と流れ

嵯峨野

竹が真つ直ぐに伸び
空を塞ぐ

青竹が絵の具塗り立てのごとく

青々と伸び

緑色の風がわたる

嵯峨野を歩く

嵯峨野を緑色の魂たちが

ぞろぞろ歩く

道は右に曲がり

道は左に折れ

道の向こうにも

嵯峨野が待っている

落柿舎

祇王寺
念仏寺

嵯峨野の道には

モミジが手を振り

柿の実が日を浴びて照り

青竹が背伸びをし

緑色の魂たちが

深いふかい深呼吸をする

竹

ひよいと思いつた

嵯峨野の竹は

天から吊されているのだと

そう考えると合点がいく

行けども行けども

青緑の竹が林立している

もし地面から

這い上ったのだとすると

一本や二本は

横にすねたり

斜めにひねくれたり

していてもよいではないか

そいつが実に

見事に垂直に林立している

こいつが偶然の仕業だと

いえるだろうか

こいつが自然のなせる業だと

いえるだろうか

こいつが地面から

顔を出し

辺りを窺い

しつかりと真上を見据え

ぐんぐんと伸び出すことなど

嘘っぱちではないか

こいつも疲れて

ひとの尻尾ばかりを

なんなのか

踏みつけようとする
魑魅魍魎ばかりが
跋扈している世の中
にあつて

行けども行けども
青緑の直線が林立する
などという仕儀は
およそ地上のものでは
ないだろう

きつと嵯峨野の竹は
ぼくたちに目眩ましの
術を使っておいて
天からサツと
サツサツサツと
瞬く間に
地面に突き立てられて
いくに違いない

素数

素数ということば

なんときれいな響きだろう

なんと美しい表現だろう

博士の愛した数式

に出てくるのを見れば

素数とはなんと控えめで

なんと完璧な存在なのだろう

素数の現れ方

素数のつながり

それは

秘密めいた

無限の存在への道筋

リーマン予想だとかの

数字の難問があるのだという

素数の現れ方

あり方に

規則性があるのかどうか

ということだろうか

などと勝手に解釈して

頷いている

多分勘違いに過ぎないだろう

多分勝手な解釈だろう

しかし

素数の存在を極めていくと

ある大いなる存在の

膝元まで辿り着く

のではないかと
いわれる

というのも

素数というものの

魔力に取り付かれた

幾多の天才たちが

別の次元に去ってさえ

素数の現れくる

宙の階段で

いまも

わいわいがやがや

ひしめきあいながら

宇宙遊泳をしているという

のだから

〔注〕「博士の愛した数式」

小川洋子著

時計

三十五年もの間左腕で
時を刻み続けてくれた時計が
京都の哲学の道で転んだとき
腕から弾け落ちたことに
気付かなかった

真後ろからきた息子が
ほらと目の前に突き出してくれ
初めてそれと気付いた

道路脇に縄を張るなんて
どうかしている
外国の観光客が道に群れ
急に立ち止まり
行く手を塞いだので
やむなく傍の縄を跨いだのだ

おまけに傘をさしかバンを抱え
不安定なままに跨いだものだから
越えたと思った靴の踵が
わずかに縄にかかってしまった

こんな人通りのなかで
転倒するなど
気恥ずかしいつたらない
と気が動転するというより
恥ずかしさの方が先だった

危ない
と誰かの叫ぶ声が耳に届いた
自分でもつんのめっていく自分に
危ないぞと叫んだ
車の急ブレーキの音も聞こえた

幸い空いていた左手を突き

左手一本で全身を支え

転びかけたという態で

さっと起きあがり

そのまま歩き出したのだった

親父なにやってんだよ

息子はそういいなかったの

だろうが

ほらよと時計を差し出したまま

さっさと先に歩いた

バラバラだ

と思った時計はしつかりと

時を刻んでいた

しかしベルトが弾けとび

無惨な姿になっていた

時計が身代わりになったんじや

ないですか

と誰かが囁いて通り過ぎた

どどつと冷や汗が湧いてきた

確かに時計は

ベルトを失つても

何事もなかったのだという顔で

チツチツと秒針をおどらせ

平然と動いていた

竹の道

青い竹が天を指し伸びる
道には竹囲いがしてあり

上る者と下る者が

互いの目を見るほどの距離に
幅がしつらえてある

風があればゴウと鳴ろう

いや、ゴワゴワと鳴るかもしれぬ

一面の竹がすつと伸びるには

きつと天の方に

甘い光でもあるに違いない

あの青い空が引き上げて

くれるのだろうか

角を曲がれば

さらに青い竹の林が続く

祇王寺へという標識があつたり

食事処があつたりする

青い竹が天を指し伸びる

青い竹の吐く気が青臭くて

ついつい早足で歩いたりして

随分間が空いた距離に

振り返り

手を振つたりする